

〈論文〉

外国語としての中国語教育と修辞学に関する研究序論

張 倩

キーワード

留学生 外国語としての中国語教育 修辞学 言語交渉力

21世紀のグローバル化の中で、異文化間の相互理解、建設的なコミュニケーションの実現が一段と重要となってきた。この相互理解、コミュニケーションの有力な担い手は複数の言語が分かり、異文化間の交渉力のある人物である。多くの場合この担い手は、自ら外国に赴き異国の教育機関で勉強する留学生であり、自国にいながら外国の言語と文化を専攻する学生である。これらの学生に対する語学教育は以上のような異文化間交流の目標を達成するための基礎作業でもある。世界各国において外国語としての語学教育の歴史が長いが、新しい時代の要請で在来の外国語教育には新しい方法論が必要となってきた。つまり言語教育の中の異文化教育、そしてコミュニケーション能力の向上といった時代の要請に応える、語学教育の新しい方法論が必要となる。この方法論の模索の中で修辞学的方法論が目下中国では盛んに議論されている。本論はこの方法論の研究の序論として、まず中国国内における言語教育の中での修辞学導入についての諸論を整理して展望するものである。

一、コミュニケーション能力としての語学

2018年10月9日中国の教育部は『来华留学生高等教育质量规范』（中国に来る留学生の高等教育における質管理規範）を公布した。その中には「对中国性的认识和理解」（中国に対する認識と理解）と言う項目あり、教育目標として中国で勉強する留学生は以下のような文化理解が期待されている。「中国の歴史、地理、社会、経済などの中国事情と文化的な基礎知識を持つこと」と規定している。また「跨文化和全球胜任力」（異文化交流及びグローバル化の対応力）の項目では「留学生は包容力、文化の多様性に適応する意識、知識、態度と技能を備え、違う民族、社会、国家の間の相互尊重、理解と団結に寄与でき

ること」と示している。これらの能力或いは意識の形成は外国語としての中国語教育などを通じて養成するものである。一方中国人の外国語習得の教育について中国の教育部は2001年に《全日制义务教育普通高级中学英语课程标准（实验稿）》を公布した。その中に英語教育の達成目標が設定されており、言語技能、言語知識などの規定以外に異文化間コミュニケーションの能力として「異国の文化、習慣の理解を楽しむ」こと、「文化差の理解、認識をさらに深めることができる」こと、「言語コミュニケーションの文化的 content と背景を理解し、異国文化に対して、尊重・包容の姿勢を持つ」ことなどを目標としている。このような教育指針で強調しているのは、語学の教育、外国語の習得の目的と意義は「異文化コミュニケーション力の向上」だと言うものである。

以上の目的達成のためにさらに中国の対外中国語教育を管轄する機関「国家对外汉语教学领导小组办公室」は一連の指導要領を制定した。例えば『大学における外国人留学生中国語専攻に関する指導要領』（《高等学校外国留学生汉语言专业教学大纲》）、またこの指導要領以外にも留学生の留学期間を細分化して長期留学と短期留学別の指導要領も策定している。これらの指導要領も、中国語の教育目標としてコミュニケーション能力の向上を最優先事項に据えている。

以上の指導要領に基づいて一部の機関の留学生に対する中国語中国文化教育の現状を観察してみると、教室での学習や日常のコミュニケーションのさまざまな状況に基づいて、適切な中国語教育のバリエーションを選択し、適切な会話を構築し理解させることにはまだ十分ではないということが分かる。留学生のための既存の中国語教育は、発音、語彙、文法などの語学体系の教育に注意を払い、徐々に中国語の適切な運用能力の養成には注意を払って教育活動を行なっているが、「適切な表現方法」と「コミュニケーションをよりよく理解する方法」の2つの側面にはまだ十分に焦点を合わせて行なっていない。この点について吳土良（2003）は、外国語としての中国語の教育は、「話し言葉を元にして聞く能力、話す能力の教育を基本とする教育は、言語運用技能としての能力の養成が基本であり、つまり話すとき、発音が正確であり語彙の使用に間違いがないこと、文法の使用が規則にあっているなどを強調する。しかしこのような言語技能は本当の意味での「コミュニケーション能力の向上」とはまだ大きな開きがあるのである。このような「コミュニケーション能力の向上」に中国語教育に修辞学の活用を考えるべきである。

長い間、中国の学界の間では、「文法学は構文の正確さをチェックし、論理学（logic）は考えや議論の妥当性を確認するものであるが、修辞学は伝達の良さを保証する」ものであると例えている。この言葉から見ても修辞学の語学教育面での活用の重要さが分かり、これは「コミュニケーション能力の向上」に寄与できるものだと考える。黄伯榮、廖序東

(2017: 14) は次のように指摘している。「自分自身の表現力を高めるために、音声、語彙、文法の知識を包括的に使用し、表現効果を高めるための修辞学的な系統が形成されている」という。修辞学は語学学習の中での「コミュニケーション能力向上」の面においてはすでに注目されているのである。修辞学は、「発音、単語、文のパターン、および修辞表現を選択する言語使用の現象」(陳汝東, 2014: 1) であると同時に、言語表現の効果に焦点を当てた、意識的で意図的な行動および言語コミュニケーションの結果でもある。外国語としての中国語教育は「中国文化の文脈における意識的で意図的な異文化間の言語コミュニケーション行動」(陳汝東, 2000: 6) である。外国語教育において体系的な修辞学教育の導入は学習者の言語運用力、コミュニケーション交渉力の向上に効果的な方法である。

中国の留学生のための既存の中国語教育は、一般的に、書かれた書面文章言語は修辞学を必要とし、口頭で話された言葉は修辞学を必要としないと考えてきた。したがって、比喩や擬人法などのいくつかの一般的な修辞方法は、中国語の作文、閲読、および中国文学の教育にはしばしば導入されている。しかしコミュニケーション交渉の面から見て、話す言葉の運用面においても書面言語と同じく、修辞学の多くの側面が適応しているものである。つまり音声、単語、イディオム、文のパターン、スピーチの図式、ディスコースの認識、ディスコースの構築、ディスコースの伝達、ディスコースの理解など、口頭言語、音声コミュニケーションのプロセス全体に修辞学的方法論が含まれている。話し言葉には、多くの場合、より多くの修辞現象が含まれ、場合によっては、従来の書面文法から逸脱したいくつかの音声表現特有な修辞現象が含まれる。これらの現象は、修辞的知識を借りると、説明しやすく外国語としての中国語を勉強する学生に理解してもらうのに便利である。修辞学教育を文化教育、言語スキル教育に取り入れることで、言語コミュニケーションに焦点を当てた、外国語教育としての中国語教育に貢献できるものだと考える。

これまで、中国における留学生のための中国語教育は、「正しく適切に表現する言葉使い」を強調し、対人的、文化的コミュニケーションとしての効果的な会話の教育にはあまり注意を払ってこなかった。人間のコミュニケーション活動は、意味や感情を適切に伝えるために言語を含む象徴的な表現を使用するだけでなく、文脈に応じて解読して理解する必要がある。修辞学は、音声認識、構築、コミュニケーション、理解のプロセス全体が含まれる。学生にとっての異文化間コミュニケーション活動では、マクロの社会的および文化的文脈を理解するだけでなく、ミクロの固有のスピーチのコンテキストを習得し、対人関係に従ってスピーチを調整し、スピーチの認識、スピーチの構築、音声コミュニケーションと音声理解の修辞原理と方法を理解し運用できることが重要である。したがって、留学生のための中国語教育への修辞学教育の導入は、静的言語要素と文化教育、言語スキル教育、

および音声コミュニケーション教育の諸要素が含まれる。これは既存の中国語教育を補完し、改善する外国語教育の実践的な試みである。

二、修辞学教育の応用価値

外国語としての中国語学習者に対する修辞学教育研究の応用価値には2つの側面がある。その一つは、修辞学は言語の応用だけでなく、世界を理解する方法でもある。多くの研究が、修辞学が認知特性を持っていることを示している。外国語としての中国語学習者のための語学教育における修辞学の教育を強化することは、中国語の学習を通じて中国語という音声の認知経路を習得し、中国の歴史文化および社会心理学的な理解に役立つ。二つ目は、修辞学の理論と方法には、言語要素と言語スキルの内容、言語コミュニケーションのスキル、そして文化へのアプローチの方法などの要素が含まれる。外国語としての中国語教育における修辞学の指導を強化することは、学習者のコミュニケーションスキルを育成し改善するのに役立つ、中国文化をより深く理解するのに役立つ。

現代中国の修辞学の創設者である陳望道はかつて、修辞学は「主に意味と感情に焦点を合わせており、修辞学は意味を表現し、感情を適切に伝えることができるように言語を調整するための努力」と指摘している。(陳望道, 1979: 3)。この修辞学の見方は、中国の学界に大きな影響を及ぼした。修辞学研究の深化に伴い、中国の修辞学者は、「美辞観」(張弓, 1993: 1)、「過程観」(張志公, 1994: 532)、「修辭是語言交際行為」(修辭は言葉によるコミュニケーションの行為)(陳汝東, 1995: 13)、そして修辞認知論などの説を提唱している。近年、学問分野の浸透と交差の度合いがさらに深まり、一部の学者は修辞学とコミュニケーション学を統合し、「修辭コミュニケーション学」の視点を提唱している(陳汝東, 2011)。修辞学の機能は、「言葉や文章の洗練」や「美しさの表現」から「対人関係の調整」、[社会関係の調整]、さらには「国家関係の調整」へと徐々にその機能が拡張されてきた(陳汝東, 2011)。早くも1987年に、呂必松は外国語としての中国語教育に修辞学的内容が含まれるべきだと提案していた。外国語教育に関連する理論と実践の深化に伴い、多くの学者が外国語教育としての語学教育にはコミュニケーション能力の育成を強調すべきであることに注目し始めた。体系的な文化知識の教育に加えて、スキルとしてのコミュニケーション能力とコンテンツとしての文化情報の融和した教育内容と教育行為の研究と実践が必要となってきた。2003年8月以来、中国修辞学会は、関連する問題について集中的な討議を行い、ほぼ毎年「外国語教育と修辞学」をテーマとする学会を開催している。

三、中国における研究状況

中国国内の外国語教育と中国語の修辞学研究教育、及び中国語の国際教育についての議論は、以下のような角度から展開されている。第一は、外国語としての中国語または中国文化の国際教育展開における修辞学教育の重要性と必要性に関する議論である。楊徳峰（2001）は、中国的修辞学は中国語の重要な一部分であるだけでなく、中国文化の重要な部分でもあるとの認識を示している。呉士良（2003）は、修辞学は言語表現の効果を向上させる科学であると指摘し、言語システムにおけるそのステータスと社会に奉仕する実際の機能は社会によって一般的に認識されており、特に言語の修辞学行動は今日の経済コミュニケーションで使用され、その有効性が認められている。修辞学スキルを習得し、言語コミュニケーションが円滑に行うことによって経済的利益をもたらすことができ、修辞学の活用はもはやビジネスチャンス獲得の必要条件になっているとの認識を示した。肖莉（2004）は、中国にきている留学生は中国に関する知識を学び、中国語の運用能力を養う必要がある以上、中国の社会や伝統文化や民族文化を理解する必要がある、これに関して中国語修辞学の教育と関わりを持つと効果的だと主張している。董明と桂弘（2006）は、中国の修辞学は中国の言語と中国の歴史と文化に非常に密接に関連していると指摘し、その修辞学は重要な言語知識と実用的な内容であるだけでなく、重要な文化的内容でもある。そして伝統的な中国文化に根ざしている中国語の単語の正しい理解、文の文法構造、および文章の意味の正しい理解はすべて、中国人的な「言い回し」、中国語修辞学的な知識を必要としている。黄玉蓮（2012）は、修辞学が留学生の中国語コミュニケーション能力を向上させ、中国文化をよりよく理解するのに役立つという。李衛国（2013）は、現在の中国語の国際教育システムには修辞学の明確な位置付けはないが、修辞学は現場の教科書や言語練習にすでに使用されており、仲介言語の使用にも修辞学が関わっていると指摘している。

第二に、いくつかの研究は、外国語としての中国語の学習者における実際運用上での誤用例に基づいて、以下のように修辞学教育の角度で研究分析を行なった。姜徳梧（1987）は文学作品の修辞学的分析を行い、于宏梅（2004）は中国語作文での修辞学の教え方を分析した。黄朝恒と葛璇（2011）は外国語としての中国語教育における「諧音語」の修辞学的な教え方の研究を行なった。田志華（2011）は中国語検定試験 HSK テストの例文を分析し、テストの難点に対する修辞学的な教育方法を分析した。李敏（2014）は、中級および上級段階の中国語テキストでの複合語の修辞的「派生意味」に関する研究を行なった。于頌（2016）は、語学の上級段階での留学生の漢詩の習得面での状況を調査し、修辞学的な教育法の提案をした。また一部の学者は、定量的統計手法を使用して修辞学の教育法を

分析した。その中に董艷婷（2013）は、使用頻度を統計し、外国人向けの総合教科書で修辞学の導入時間と配置順序について考察を行なった。殷夢婷（2015）は、中級総合中国語教科書から修辞格の分析を行なった。さらに修辞格の種類、修辞格の内容、および修辞格のジャンルの分析も行なった。劉男（2018）は、中級および上級の留学生向けの中国語教科書『発展漢語』を分析し、既存の問題を指摘し、シラバス、教科書の編集、修辞学の教えについて提案した。劉華（2019）は、外国語としての中国語教育における植物比喩の教育と応用について論じた。

第三に、一部の研究者は修辞学教育の指導方法を分析した。たとえば、陸慶和（1998）は、最も一般的な修辞格の知識と応用例を語学学習の中級段階に配置して、修辞現象を読み解き解釈する能力と、実際の応用力を育成することを提案した。曹成龍（2004）は、教科書の言語修辞的特徴を学ぶように学習者を指導し、学習者の理解を刺激するためにさまざまな指導方法とトレーニングフォームを採用することを提案した。曹成龍はさらに広範囲な純粋な修辞学の研究ではなく学習者の修辞学の使用によって感情を伝える言葉の美しさについて分析し習得を促すことを提唱している。一般的な修辞学の表現方法を分類し、学習者の修辞意識を強化して、修辞のスタイルとその機能を学生に理解させる努力をした。呉迪（2006）は、既存の外国語としての中国語教育は言語体系の教育に焦点を合わせているが、言語修辞使用の面では無視しがちである点を指摘し、積極修辞や消極修辞の修辞手法が外国語としての中国語教育と密接な関係があることを説明した。周虹（2008）は、語学の初級段階において、学生の修辞学意識を育ち、修辞の基本的な原則と実践方法に注意を払ってもらい、特定の状況での言語使用の適切性を強調することに重点をおき、中級から上級の段階では、修辞学の具体的なスキルを養い、外国人学生が中国の修辞学の現象を把握できるように注意を払ってもらい、語学段階が終わり、大学専門科目の専攻段階に入った留学生に対しては、修辞学に関する専門科目で、修辞学理論と方法の体系的な教育が必要となることを指摘している。黄玉蓮（2012）は、修辞学教育の原則を指摘し、初級段階では感性的に理解してもらい、中級段階では知覚資料によって理解してもらい、上級段階では理論的に把握してもらうことを提唱している。程詩博（2014）は、言語、言語感覚、文化の三つの角度から、外国語としての中国語教育における修辞学教育の方策を提案している。

第四に、一部の研究者は修辞学教育の概念を分析した。陳汝東（2004）は、修辞学を基とする中国語教育の概念を提唱した。外国語としての中国語教育の全過程において、コミュニケーション力の向上を主目的とする修辞学の教育と実践が必要であることを主張した。外国語としての中国語教育は言語知識、単語文法を教えるのではなく、修辞コミュニケーションを教えるという観念に置き換えてくるべきだと指摘している。この面において

すでに修辞学研究会には多くの新しい研究成果が生まれている。これを十分に活用すべきだと提示した。張飛祥（2016）は、外国語としての中国語教育の場において修辞学教育に関する研究の現状を分析し外国語教育に関する修辞学の研究はまた初期段階で、研究成果はまだ限られており、これからこの方面での理論的研究がさらに拡大していく必要性があることを指摘した。

第五に、修辞認知に関する研究。陳汝東（2001）はその専門書である『認知修辞学』において、認知と修辞学を体系的に分析し、修辞学コミュニケーションの心理的メカニズム、人格心理学と修辞学認知の関係、社会心理学と認知との関係、および修辞学の認知構造を分析している。認知における民族心理ネットワーク、修辞コミュニケーションにおける社会的役割の認知、修辞範疇での談話認知、認知範疇での比喩と思考モード、および修辞コミュニケーションにおける認知秩序の構築など一連の考察を示した。李盛兵、周健が編集した『中国語国際教育の理論研究』（2013）は、外国語としての中国語教育の認知と修辞を研究している。

第六に、修辞学教育に関する包括的な研究として、陳汝東（2000）の『対外中国語修辞学』のように、外国語としての中国語の修辞学に関する専門書も刊行されている。談話などの規則は、中国語の構造規則に準拠し、中国式の規範に準拠し、スピーチの動機と目的に準拠して、コンテクストに適合している必要があると主張している。またこの本は系統的に語彙、熟語、句式そして修辞格、修辞手段と方法を述べている。また修辞規則の角度から中国語の構造特性に合わせた修辞規則を提示し言語活動の中で言語動機と言語目的との一致性による言語環境の構築などについての見解を示した。

四、結び

以上中国国内における外国語としての中国語教育と修辞学との関連に関する研究動向を概観してみたが、言語教育の基本的な目的はコミュニケーション力取得という視点で多くの研究者は在来の語学教育法を改善し修辞学の導入による効果的なコミュニケーション力の増強の教育方法を模索している。

修辞学は古今東西を問わず、それを思想や感情、情報を効果的に伝達するための学問として研究され利用されてきた。外国語としての中国語教育の目標がコミュニケーション能力の向上に位置づけられ、最優先事項と認識されている以上、語学教育に修辞学の方法論を導入するのは必至なことになる。実際問題として、無意識の中ですでに多くの学問分野が交差して学際的に浸透し各分野の方法論を活用している。これらの交差活用をもっと明確に意識的に行うことを期待している。在来の語学教育の文法論では、修辞学の語彙の分

類及び使用語彙の的確な把握の点に通じている。この方面において文法論と修辞論の融合は可能かつ有望な外国語教育の試みとして期待できる。また修辞学の追求する、事柄の論理的な分析と立論の厳密性は論理学に通じているのである。さらに修辞学は人を感動させ説得するスキルでもある点では、文学や詩学と通じているものである。これらの点では中国の長い文章的な伝統と脈々繋がっている。中国の文論には曹丕の「文章は経国の大業なり」、韓愈の「文は道を貫く器なり」、「書経」の「詩は志を言う」などの名言があるが、これらの観念は正に修辞語学教育のコンテンツとなるべき理念であり、中国伝統文化を理解するための典型的な語録でもある。またこれらの言葉は中国古典修辞法の模範文例でもある。中国の『詩経』、そして日本の『古今和歌集』の序文も影響を受けた「天地を動かし鬼神を感ぜしむるは詩より近きは莫し」という東洋での文学、修辞学兼ねた名文から証明されているように、語学教育は単に孤立的に文法論か語彙論かのような教授法を固守するものではなく、大いなる想像力を以って色々な学問分野での研究方法との接点から外国語としての語学教育を考えるべきだと思う。

引用・参考文献：

1. 陈昌来：《对外汉语教学概论》，儒森教育出版社，2005年。
2. 陈光磊：《修辞论稿》，北京语言文化大学出版社，2001年。
3. 陈汝东：《对外汉语修辞学》，广西教育出版社，2000年。
4. 陈汝东：《认知修辞学》，广东教育出版社，2001年。
5. 陈汝东：《新兴修辞传播学理论》，北京大学出版社，2011年。
6. 陈汝东：《修辞学教程》，北京大学出版社，2014年。
7. 董于雯：《对外汉语语用教学研究》，中国社会科学出版社，2015年。
8. 顾伟烈：《中国文化通论》，华东师范大学出版社，2005年。
9. 胡壮麟：《认知隐喻学》，北京大学出版社，2004年。
10. 胡壮麟：《语言学教程》，北京大学出版社，2013年。
11. 黄伯荣，廖序东：《现代汉语》（上下册），高等教育出版社，2017年。
12. 卢晓中：《高等教育新论》，高等教育出版社，2016年。
13. 彭增安，陈光磊：《对外汉语课堂教学概论》，世界图书出版公司，2006年。
14. 王希杰：《修辞学导论》，浙江教育出版社，2000年。
15. 王寅：《认知语言学》，上海外语教育出版社，2007年。
16. 温端政，吴建生：《中国惯用语大辞典》，上海辞书出版社，2011年。
17. 吴勇毅：《对外汉语教学法》，商务印书馆，2012年。
18. 曾毓美：《对外汉语语音》，湖南师范大学出版社，2008年。
19. 赵金铭：《对外汉语教学模式概论》，商务印书馆，2007年。
20. 张积家：《高等教育心理学》，高等教育出版社，2016年。
21. 张旺熹：《对外汉语本体教学概论》，商务印书馆，2013年。
22. 周小兵：《对外汉语教学导论》，商务印书馆，2009年。

(二) 英文文献

- 1.Lakoff, G.&M. Johnson. *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press,1980.
- 2.McCroskey, James C. *An introduction to rhetorical communication: a western cultural perspective* (9th edition.). Pearson Allyn and Bacon,2006